Dies irae -駆ける、現人神の刹那-

マキナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｉｅｓ　ｉｒａｅ　―駆ける、現人神の刹那―

【Ｎコード】
Ｎ１５６４Ｙ

【作者名】
マキナ

【あらすじ】
彼の渇望――総てを模倣し、全てを凌駕するがために己が渇望を満たすその所業は神のもの。他者を模倣したがために己の罪を背負いつつも、崩壊するはずの世界を救うがために並行世界を駆け巡る、これは現人神へとなった一人の青年の物語。

序章　第一話「回帰」（前書き）

どうも、Ｒ－１８で投稿してた水銀です。突如として大変迷惑をかけますが、年齢制限を解除すべく変更しました。
ユーザーに読者の方々には迷惑をかけますが、どうぞご了承のほどお願いします

序章　第一話「回帰」

永劫回帰。
無限に繰り返す∞螺旋。永劫終わることのない回帰の渦。その奔流に飲み込まれ、永遠に払拭することができない既知感で満ち足りている世界。
既知感に蝕みを受け、永劫既知しか感じ取れない虜囚がいた。その男は救いを求めるが如く、永遠繰り返し繰り返し、そして無限の果てに狂った座の男。
しかして、この男が真に渇望するのは、まさしく己が生み出したこの世界の超越と破壊、そして女神に捧げる愛を示すため、救うがために動いているということに他ならない。
黄昏の浜辺で悠久の時を永劫留まり続け、停滞の世界に座す少女を救いだし、そして彼女の手で抱かれる（殺される）ことが、彼の望み。
その切望、その渇望、その葛藤。そして……なんという究極の愚直にして馬鹿なのだろうか。
これらが故に男はこの蛇の神に対して、それなりの敬意を払っているのだ。現人神としての坐に座す水銀は確かに狂っている、それは否定はできない事実であるが、同時に一途ともいえるからだ。
だからこそ、
「ああ……なるほど。その渇望は永劫繰り返し満足できなくてはまた幾千の時をまた同じことを繰り返すということか。幾星霜繰り返し、女神による断刀刃で斬首を希うとは、皮肉なものだな。マルグリットに出会うことでおまえの運命は既に定まっていたというのに」
そして、と男は付け足し、
「黄金の獣、破壊の君との邂逅もまた然り。出会うべくして出会い、それ故にお前は永劫回帰の環から抜け出せずにいる……水銀中毒だな、まさしく」

哀れむように、慈しむように、称えるように、それでいて懐かしむように見据えてから瞼を閉じ、
「なら……いいだろう。ここから先の戦はお前たちにとっては皮肉にも奴が流れ出させた世界で奮闘する道化ということなら、尚のこと俺が止めを刺してやる。涙を流して称えろよ英雄ども。まあしかし、俺にも事情があるんでな。そこにいくまで、せいぜい半世紀を過ごしているんだな。それまでは……罰当たりな娘、マルグリット・ブルイユよ。俺も汝に慈しみの加護があらんことを、エイメン」
十字を切ってから男は身を翻し、その背後で歪み、そこから覗かせる“世界”を見据え、
「救済するまえに、やることを総て済ませてから参陣させてもらう。この模倣の神、デミウルゴス・ボイマンドレース。現人神黒井和哉がな」
そう呟くようにして言葉を残し、その男は姿を消していた。

そう、これは模倣という稀有な渇望を有し、神格された一人の青年の紡ぐ物語なのだ。

序章　第一話「回帰」（後書き）

本当に申し訳ありません。こちらの都合で急遽変更したことに関して、誠に申し訳ありません。

第二話「怒りの日」（前書き）

どうも、マキナです

第二話「怒りの日」を投稿したいと思います

第二話「怒りの日」

黄金の獣。破壊の君。髑髏の王。墓の主。

そう比喩される男がいた。異なる世界、並列世界において、その男は他者を一際抜きん出ており、その実力、カリスマ性、そして何よりその容姿も総てが異なっていた。

万能すぎるその男は、かつてはナチス・ドイツ政権時において斬首官として名高く、当時においてある意味で恐れられた男、ラインハルト・トリスタン・オイゲン・ハイドリヒ。

現人神である彼が垣間見た並行世界においても、彼ほどの逸材もそうはいない。指揮官としても妙技、その卓越した実力。普通とは明らかに比較もできないほどに超越している破壊の光。

彼が胸に抱く渇望もまた王としてのそれだ。全力を振るったことがない。いや、振るおうとしても全力など出せば灰燼となる。それだけに、彼の生涯はつまらなさを帯びていた。

しかし、さることながらそれを成就させるため、そして彼が今現在蝕まられている法則を唾棄するため、獣の軍勢を率いているのだ。

元々首切り役人がなぜ魔道に堕ちたか……それは語るべきもない、そう括ることができる。

詐欺師との邂逅、これがすべての始まりであり終わりの終末点にして終着点、帰結するべき座標なのだ。

奴と出会い、その接触によって己を引きずり込み、やがて破滅させる自滅因果となったのだ。

奴は誰よりも自制に長けていたはずだ。しかし、詐欺師との出会いによりその渇望を、全力を発揮させるがために彼の水銀と盟約を結んだ。故に、奴は総軍を率いる魔性の君へと変貌したのだ。

無為だと遠ざけ、塵芥だと烙印を押して通り過ぎ去った。本当は総てを愛してやりたかったはずなのに、愛するには森羅万象万物総てが脆すぎた。儚すぎたのだ。抱擁どころか柔肌を撫でただけで砕

けてしまう硝子のような繊細さ。
　ああ、なんたる無情。森羅万象、幾星霜この世は総じて繊細に過ぎるのならば、奴が誇る愛は真の破壊の慕情。愛でるためにまずは壊す。壊すことで己の愛を示す。そしてそれは、すべて等しく平等に振り分けるのだ。頭を垂れる弱者も、傅いて跪く敗者も、反逆を目論む不忠も、総てが黄金の獣にとっては愛しいのだ。それ故に破壊する。
　そうだとも、これこそ悲劇の幕開け。一人の斬首官が一人の詐欺師との邂逅がきっかけであり、定められたことであるのなら、抜け出すためにはその詐欺師を止める必要がある。
　ならば――
「怒りの日は彼の日なり。終末の時を迎えるがために総軍を、獣の軍勢を率いるラインハルト・ハイドリヒではなく、その根源たる双頭の蛇を斃す必要がある。だが、奴も事実上の現人神。並大抵では死なないし、奴のあの回帰がある限り、無限に繰り返しさせることになる。それを防ぐには……」
　己もまた、その蛇を打倒するための力をつける必要性がある。元来、神を斃すのは人だ、つまり人間だ。神によって生み出され、神の盤上で踊り続ける道化。だがしかし、古今東西天上の神を殺し、打倒してきたのも同じ神々、そして人の手によるものが多い。
　ならばこそ、
「そうだとも……獣よ、そして水銀。お前達を必ず俺が解放させてやる。その力も、この俺が模倣してやる。だから、その座にてとくと見ておけ」
　漆黒のマントを翻し、両手に嵌めた白き手袋に魔法陣が刻まれ、首元にはストラが垂れ下がっており、まるでその黄金の獣を模した格好の男は双頭の蛇が巻きつく世界を睥睨してから、
「では……本当にこれでしばらく見納めだ。クラフト、ハイドリヒ。そして……」
　次元の歪みに入る一歩手前で小さく、彼の女神の名を小さく呟い

て消えて行った。

第二話「怒りの日」（後書き）

次回、主人公設定を投稿する予定です

設定（主人公）（前書き）

今作品の主人公の設定を送りたいと思います。

設定（主人公）

黒井和哉（くろいかずや）
年齢ー２０
身長ー１７５
体重ー６５
視力ー６．０
容姿：整った顔立ちに鋭い目つき、艶やかな黒髪に黒き双眸。
色：黒・白・銀・赤
本作品の主人公。
身丈は高く、卓越した戦闘能力を有し、達観したものの考え方、戦術・戦略など幾多モノ幅広い情報に知識を有しているため、状況に応じて対応できるほどの柔軟性も兼ね揃えている。
人の身でありながら神格化された現人神。本来、現人神とは「人であり神でもある」もしくは「神が人の姿で下界に出ている時のことを指し示すが、その定義とは異なり、この世界の場合、人の身でありながら神になるほどの実力を持ち合わせ、超越した存在のことを指す。神格化された現人神には神へと昇格した際の恩恵として、一つの願いを叶えることが許され、そして現人神……黒井和哉は己が起源から来る渇望「模倣」によって、平行世界に存在する主人格を取り込み、己と同化・同調させること。そして、それ故に彼は総ての世界にその人物へとすり替えることが可能となった。だがしかし、これによって黒井和哉はその人物たちを抹消してしまったことへの後悔の念を胸に抱き、己を許されぬ虜囚と比喩している。
加え、和哉は並行並列世界の己自身も取り込んだことで、単一で既に同じ己が幾多もいるということになり、仮に神格の己が死してもまだ己という個我と複数の魂がある限り、神格化された“黒井和哉”は生き続けるということになる。魂の円環法則から既に脱却しており、これはマルグリットと同様に既に異常の存在、すなわち流

出位階まで到達した求道型の魂ということになるので、他の法則に縛られることはない。

「異能」

異能とされる能力「模倣」は、文字通り他者の渇望、能力、武器、性格などを取り込み、己が中で変革させ、自己を異界にすることで世界法則を、自己を起点として発生させることができる。よって、彼が一度でも視た、感じたのなら、それが例え事象であれ異能の特異中の特異であろうと発現することができる。この「こうなったらいいな」「こうなりたい」という二重渇望は起源から帰来するものであるため、求道型の魂を保持しながら覇道型の流出へと到達しているという二重の矛盾を有しているということになる。

「武器」

武器としては、現人神でなくとも徒手空拳で既に神秘を起こせ、なおかつ達人（アデプト）級の実力を有しているので必要は要らないといえばいらないが、敢えて彼が獲物とするなら神器と化した日本刀に二丁拳銃、そして陰と陽とで対と成す干将莫耶が彼の主流ともいえる。

しかし、先の上記で述べたとおり、彼が世界を既に視て歩き回った中で、同じ世界でも異なる並列世界の能力を有しているので、既存の技能は既に彼の能力と化している。

触れた対象はAランク相当の宝具になり、己を雷にも焔にもすることができ、指の摩擦による遠距離の炎遠隔操作も可能である。特に、錬金に自負があり、無から有を、錬金術においてその絶対法則を無視した業を行使することができるのだ。

元々は我流で身に着けた基礎のスペックがあり、神格化されたことで魔法の真似事もできる。その内に渦巻く総軍に匹敵する魂はまさしく囚われの少女、マルグリットと同等であり、それは上記で説明した通り、並列世界の主人格たちを取り込んだことで強化されたということ。

また、神格化されたことで極僅かな者しか数百万人に1人の「王の資質」を持つ者しか身につけることができない覇気、覇王色の覇気を有することになり、その覇気は歩くだけで絞った対象にのみ気絶させ、、一睨みしたり素通りするだけで、一定の実力者以下の生物を気絶させる。

武装色の覇気、見聞色の覇気も使用することができ、概ね彼が纏うのはこれらである。

設定（主人公）（後書き）

次回、第三話「無限の影」
すぐに投稿しますので、申し訳ありませんが、どうぞ良しなに

第三話「無限の影」（前書き）

どうも、マキナで～す

先の説明通り、Ｒ－１８で投稿していた作品を、年齢制限にしたことを、誠に申し訳ありません。

第三話「無限の影」

まず第一に、闇が広がっていた。
そう。それは比喩でもなんでもなく、本当の意味で闇が広がっていた。
次元の空間を闊歩する中、狭間の空間から湧き出てきたその凝り固まったかのような闇がぞろぞろと這うように周囲に展開していた。
本来ここは異空間であり、次元の狭間をそれも特別奇特なモノでない限りは干渉はできないのが道理。だが、
「……なるほど。この闇、人の想念と怨念、そして人の負の感情が炸裂して無限分裂していったモノ」
既にその存在に思い当たる和哉は、睥睨してからそう小さく呟いてから、
「ハートレス……しつこいことこの上ない。無限に跋扈しているとはいえ、この次元と次元との空間まで干渉してくるとは。外なる神でもあるまいし、地平に棲息していればいいんだよ」
鬱陶しそうにそう嘆息してから、首から垂れ下げてあるストラに少し撫でるように触れてから、再び闇に視線を向け、
「邪魔だ。どけ」
一言。
たった一言。それだけで彼の周囲から尋常ならざる莫大な気が放出された。その放たれた気にハートレスたちが触れた瞬間、弾かれたかのように吹き飛び、同時に霧散していった。また、動かずともその気の余波で固まっていた集団は瞬時に音もなく消え去っていた。
心なきモノ、ハートレス。人の心の負によって生まれた闇の産物。それは人という神の生み出した脆弱な玩具が生ませてしまった癌。ならば……
「それを払拭するのもまた神の所業。いや、現人神である俺にとっての冤罪か。ああ、分かってるとも。償ってやるとも」

淡々と、それでいて自制するように瞼を閉じていた和哉は、徐に両目瞼を開くと、そこには黄金の双眸を覗かせていた。
「いいぞ……来い。どうせ他世界に行く途中だったんだ。モノのついでだ、掃除をしてやる。今、ここで消してやる」
瞬間、それが合図だったの如く闇の固まりが無数に散らばり、一斉に襲いかかってきたのだ。
孤立無援。絶体絶命に思えるこの状況。だがしかし、
「甘く視るなよ、この身は現人神だ。おまえ等のような雑魚と一緒にするな」
そう侮蔑を吐き捨てると同時に、懐に入れていた二挺拳銃を、白と黒の陰陽銃、相克する禍々しい魔銃が握られていた。
二挺の拳銃の銃身を真正面に定め、その瞬間にトリガーを引いた。
炸裂する銃弾の嵐。一発一発が魔弾であり、その銃弾が過ぎるだけで消し去るほどの禍々しい高威力を内包している危険度はまさしく凶器そのもの。
だが、それと同時に鮮麗されたその射撃センスに精密さは荘厳さえ感じさせてしまうほどだ。
一発、また一発。
放たれる銃弾が闇の固まりを一筋の閃光として消し飛ばし、すかざず向かってくるハートレスを反撃を許さぬ速度で撃ち抜いていた。
二挺による両手打ち。間髪入れずに対象を撃ち抜く必中率は高く、超高速の連射撃ちは到底真似できぬほどに鮮麗され、なおかつ驚異。
そしてなにより、ハートレスに感情などはない。そしてなにより、命を持たぬ疑似生命体。動いているのも、それは光を、魂を欲するがため。ならばこそ、加減は不要。
二挺の拳銃を器用に使いながら敵を葬っていく中、背後から数体のナイトソルジャーが襲いかかっていた。
前方を視ている和哉の死角を突いた完全なる奇襲。気配も感じさせない暗殺者は、そのまま現人神の首を刈る、その寸前、

「……舐めすぎだ、ハートレス風情が」

侮蔑の言葉と共に背後のハートレスの背後から無数の弾丸が貫いていた。なぜ、などという疑問さえ抱かせる前に霧散したハートレスを尻目に和哉は前方に跋扈する闇の軍勢を前にして嘆息し、

「仕方ない……跳弾を使用したんだ。なら、そろそろ軽く捻るか」

そうぼやくと、二挺の銃の銃身を真横にして、完全に正面がガラ空きになり、まさに無防備な状態。だが、

『……ッ！？』

それになにを感じたのか、心がないはずのハートレスたいの動きが止まった。

それはまさに有り得ない事態。ハートレスに感情も、まして心など皆無だ。だが、それにしてもこの状況はあまりにも異常過ぎる。

止まるはずのない軍勢が止まる、これを眺めるように視ていた和哉は感慨なく、

「畏怖を抱く……か。まあどうでもいい……失せろ」

そう呟いた刹那、和哉の双眸が再び黄金の色をさらに増して唱え始めた。

「我は輝きに焼かれる者。届かぬ星を追い続ける者。

届かぬゆえに其は尊く、尊いがゆえに離れたくない」

それは平行世界にいる、現在の黄金の獣と臣下にして紅蓮のカスパール、赤騎士である女傑が刹に願い続けていた渇望。

「追おう、追い続けよう何処までも。我は御身の胸で焼かれたい——逃げ場なき焔（ほむら）の世界」

永劫追い続けていたい、永劫黄金の光に焼かれ続けていたというその忠節の塊にしてもっとも一途であった女の思い。その銘は……

「この荘厳なる者を燃やし尽くす——Ｍｕｓｐｅｌｌｚｈｅｉｍｒ Ｌａｖａｔｅｉｎｎ（焦熱世界・激痛の剣）」

灼熱の劫火で焼き尽くす焔に他ならない。

詠唱と共に銃口が輝きを増し、再び二挺の銃口を真正面に向けた

瞬間、放たれてはならない紅蓮の焔の魔槍が放たれた。
それを前に抗うことも出来ずに、ハートレスたちはただ空しく断末魔も、怨念も残さずに無限に跋扈していた闇が焼き払い消え去っていたのだ。
静かに役目を終えた二挺拳銃を懐に仕舞い、闊歩し始め、歩いていくとまだ生きていたのか、隠れていた一体のハートレスが足もとから鋭い刃を下から放ってきた。それを睥睨して、
「下らん」
一蹴した。
その場で震脚し、足もとに隠れていたハートレスを揺さぶって宙に引っ張りだすと同時にハートレスの頭を鷲掴みにし、
「……粛」
静かに掴んだ状態のまま呟くと、鷲掴みにしちたハートレスの肉体が徐々に内側に引き寄せられるように捻れていき、圧縮されていくようにして小さくなり、そして霧散した。
これほどの所業をして尚、和哉の表情に疲労の二文字はなかった。当たり前だ、現人神は人の身でありながら神格された超越神だ。この程度のこと、神々の黄昏に比べれば比較にすらならないことだ。
「さて……掃除は完了した。無限に存在するハートレスは不滅。故に、また出てくるのは承知している。まあ次に出てきたら、本当に滅しに行くがな」
最後にそう言うと、何もなくなった次元の通路を再び闊歩して行った。

第三話「無限の影」（後書き）

次回は近日投稿する予定です

ではまた

第四話「荒唐無稽な演目　Ｇｒａｎｄ　Ｇｕｉｇｎｏｌ」（前書き）

どうも、少し遅れました。
新しく投稿します。
どうぞ、ご観覧あれ

第四話「荒唐無稽な演目　Ｇｒａｎｄ　Ｇｕｉｇｎｏｌ」

そも、古今東西神々の闘争、そして戦とはなんだろうか？
各神話で名を轟かせる神代の神々は、どれも彼もが一癖も双癖もあり、絶えず争いが勃発していた。そして、それらには小さなものから大きなものまで絡んでおり、大小あれど女が関わっているのは必定。
これは神話のみにあらず、どの事柄に関しても女が絡んで良いことなど一遍もない。幾星霜度の歴史を見返そうとも、決して善にはならず、総てが崩壊するか、それとも自滅するかの二者択一。女神は男神の良き伴侶であると同時に、亀裂を生じさせる自滅因果とも取れる存在。
そして、神々の中でも、各神話の中でも一際目立つ存在といえば、北欧の神話に名を轟かせる最大のトリックスターであるロキだろう。
あれの気性は転々と変じやすく、また演目を奏でる一類の道化とも取れるモノだろう。
欺き、騙し、不意打ちなどは邪悪な気性から来るものでなければ、まさしく邪神であろう。
と、ここまでの前置きは置いておくとして、さてさて――
「大聖杯、聖杯戦争、ラインの黄金、冬木、死徒二十七祖、サーヴァント、宝具、衛宮、遠坂、間桐、守護者、魔眼……やはり総じて、この世界は凄まじいな。他の世界を圧倒するこの存在感、侮れないのは変わらんか」
そう嘯くのは次元を闊歩し、先のハートレスに神罰を下した現人神の黒井和哉本人。他の世界を睥睨しても尚、和哉の視線を留めさせるのは、この巨大にして巨大な黒と紫と言うドス黒い色で染められ、邪悪な鎖で束縛されている球体状の世界に他ならない。
幾多もの外史を誕生させ、それでも尚留めることを知らぬ特殊な世界はどの既存の世界よりも遥かに堅固であり、その内にいる存在

達はどれも彼もが強き個我を保持している畸形の世界。
故に称するなら――
「かつて存在した“月のアルティミット・ワン”朱い月のブリュンスタッドの銘から名付けて”ＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ”、といった所か。しかし、どうも畸形中の畸形だな。代表……いや、象徴的ともいえるか。この世の矛盾と混沌が綯交ぜになった澱みし世界。境界、運命、月の姫……大きく分けて計三種の世界が存在するが互いに逢い見えない螺旋世界。出くわせば、互いが互いを喰らい合う自滅因子を自然と併せ持つ地球（プラネット）。
ここまで強大な力の保持者たちが出くわさず、尚且つ世界もそれを保つほどとは……水銀からしてみれば、いい玩具が見つかった。黄金からしてみれば、素晴らしいと言わしめるだろうな」
死徒二十七祖が世界の触覚。月姫も地球から生み出されし触覚。そして、朱い月が自身の器となる「真祖」の最高候補の器。それだけでも十分に世界が圧迫しかねない世界に、聖杯によって呼び出されるのは英霊の資格を持つ英雄たち。破格の魂に純度を持ち、その霊格もまた必然的に高濃度である。
終いには、魔眼の中でも特異中の特異。万物に存在する“死”を殺すことができる直死の魔眼。それを行使しても尚異常を来さない両儀。
この特殊な世界を故に、現人神である和哉は高く評しているのだ。
「……と、御膳立ては十分か。既に俺の手元には十分なモノを手にしている。ならば、後は聖杯から抜き出すだけだな」
自らの手元にある“ある武具”を一瞥してから、再びこの既存の世界へ視線を落としこう言った。
「――さあ、踊れよ主演たち。主賓をあまり退屈させるなよ。俺も既存に沿うのは序章だけだ、余りにも目に余るのなら……この手で滅殺してやる」

人としての黒井和哉と神としての黒井和哉は、そうまるで彼の水銀のように宣告すると同時にその世界へ降りて行った。

第四話「荒唐無稽な演目　Ｇｒａｎｄ　Ｇｕｉｇｎｏｌ」（後書き）

次回、近日中に新しく投稿する予定です
では、どうぞご期待あれ

第五話「ｉｎｃｏｍｐｏｓｉｔｅ」（前書き）

どうも、マキナです
投稿遅くなりましたが、新たに更新します
では、どうぞ

第五話「ｉｎｃｏｍｐｏｓｉｔｅ」

……風が吹く。

涼しい微風が真夜中、音もなく心地よく吹く中、真夜中の天に魔法陣を足場にする存在がいた。

黒井和哉。

黒衣に首元からストラを垂れ下げ、優雅に微風を受けても尚、涼しげにその端正の整った顔立ちで新たに降り立った一、二位を争うほどの強大な世界であるＴＹＰＥ－ＭＯＯＮの内の一つの街、冬木市の上空で見下ろしていた。

『……』

涼しい夜風が上空であろうと吹く中、瞼を閉じ瞑想している和哉はこの世の怨嗟の声に思念などを感じ取っていた。

この世界は強く、禍々しく、それでいてそれに抗う人の姿が象られている。それ故に、喜劇であり悲劇の演目の場所としては上等なのだ。加え、このような世界で、特に冬木市は曰く付きの霊地でもあるのだ。

なぜ霊格が強く、そして霊地とされているのか？それの総てがこの街で起きている最大の戦争、聖杯戦争にある。

万物の奇跡を詰め込んだ聖なる杯を賭け、己れの覇を競い鬩ぎ合う魔術師同士の狂気に染まりし闘争と言う名の地獄の再演。

やがてそう銘打たれることになる聖なる大儀式は、原初の時ともって、純粋な願いのみを受けて成就するはずであった。

だがしかし、今より約二百年前、ユスティーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンと遠坂永人、マキリ・ゾォルケンによる創始されし大聖杯の儀式。

当時は魔術協会と教会は殺し合いをしていたため、召喚の地には教会の眼が届かない極東の地が選ばれ、アインツベルンが聖杯の器を用意し、遠坂がサーヴァントを降霊し、マキリがサーヴァントを

律する令呪を作り上げた。
しかし、儀式は結局失敗に終わり、悲願は果たされることなく今も子孫に伝えられ続ける。
現在においても未だに根源に至ろうとしているのは既に遠坂のみ。
アインツベルンもマキリも聖杯の完成、つまり第三魔法の再現のみを望んでおり、再現した後に自分達がどこを目指すのかすら忘却の彼方にある。
それは夢想し、願い、渇望し、切望し、その根源に至るための渇望が喰い貪り摩擦して擦り切れた怨念のようなもの。
求めるのは聖杯の完成。だが、それが敵うことは一生ないだろう。なぜなら、既に聖杯は狂っている。それも、第三回目を境に、純粋にして誰しもが求める在りし聖杯は既に汚染され狂いに狂い、泥で埋め尽くされた穢れた臓腑でしかないのだ。
それを求め、救済を求めるのは愚者であり、愚の骨頂というもの。そも英雄譚を気取りたいというのなら、それこそ後世に名を轟かせるだけに留めればいいだけのこと。戦を求めるだけの英雄ならまだしも、己が歴史を改竄する？
「……ふ、馬鹿馬鹿しい。それで一体どうなるという？仮に聖杯を入手できようと、いや……入れたとしても歴史の改竄は抑止力に直結する行いそのものだ」
後世、すなわち現代に残りし記録の数々はどれも彼もが歴史に連なるものばかり。例え邪悪で邪(よこしま)で満ち足りていようともそれは物語として完結している。
それを、偉大なる歴史を改竄？なかったことに、やり直しだと？それをこの現人神が許すとでも？
「いいだろう……そこまで救済が欲しいのなら、この俺が救済してやるよ。孤高でいたいんだろ、騎士王殿？なら、お前の願望は俺が殺してやるが……まあ世界は俺が救おう。この世界が消え去ることなど、俺が許さない」
そう宣誓するように、強き堅固なる意思を明確に示してから、魔

法陣の上から見下ろしていた和哉は徐にとある方角へ鋭い視線を放ち、
「聖杯……」
ドクンッ！
強く、今までとは根本的に異なる明確な殺意を乗せた睨みつきで見据えていた。神気を発する和哉の総身は、彼の黄金の獣の如く輝きを増し、水銀の如く人外なる気配を発していた。
「お前に取り込まれた霊格……悪いが、俺の元へ返上させて貰おうか」
黄金の瞳に変わった和哉が徐に右手をその“方角”へ向け、掌を見せるようにしてから――
「掌握、並びに奪還開始――！」
一気に握りつぶした瞬間、鳴動した。
魂の叫び。悲痛な雄叫びが瞬く間にこの冬木市全体に木霊していき、それは異常事態ともいえる状況でもある。大霊格にして至高とされ、今でも邪性を有しながらも聖杯の名を冠している大聖杯に対して、物理的にではなく間接的にではあるが干渉し、剰えその聖杯に取り込まれたかつての英霊の魂を、霊格を抜き取ろうとしているのだ。
通常、いや……これは魔法使いにも真祖にも言えることだが、一貫してこれは有り得ない。出鱈目もここまで通ればご都合と称しても過言ではないだろう。聖杯に取り込まれた霊格は聖杯戦争に応じてそのマスターの波動による同調に所有者の持ち物などで呼び出しを決定するモノであり、それは総て聖杯があってこそのことである。その大本である聖杯から強靭な英霊の霊格と魂を奪おうとするこの所業は、業が深い……と言えるはずもない。
清らかで純粋な聖杯なら彼もこのような暴挙には出なかったはずだ。だが、今回のこの聖杯は彼が知りうる中でも邪悪にしてあってはならない代物だ。生み出してはならない、呼び出してはならないアヴェンジャーを呼び出し、聖杯の中身が完全に善とは真逆の相対

相克物。故に、彼の英雄たちを聖杯の軛から解き放つのだ。
征服王も取り除くべきなのだが、最優先はかつて魔術師殺しの計略により自害させられ、または騎士王との戦いの末に王の腕(かいな)の中で成就されたものの、その魂魄は聖杯に取り込まれたまま。
ならばこそ、この二柱の英雄を救い上げることが重要と言うもの。
しかしなれど、聖杯からの抑制力は凄まじい。紫電を撒き散らしながらもアンリマユの“あの”泥が纏わり付こうとするが、和哉の発する神気と神威によって蹴散らしている。並のサーヴァントなら発狂しかねないこの汚泥を流石の和哉も警戒はする。
「邪魔をするか、アヴェンジャー……お前のその薄汚い願望なんかでこの俺を束縛しようと？願いを成就させようとでも？巫山戯るなよ屑が。塵芥風情が現人神に対して阻むだと？その驕慢、その傲慢、あの在り方。看破した上で消し飛ばしてやる」
そうだ。黒井和哉の本懐は世界の崩壊を防ぐこと。それを成し遂げるために、今この場にいるんだ。彼が模倣神として謳われるのも、そうして自負して尚彼の起源は止まることがないのも、彼がそれを宿願として臨むからである。
望みし力は栄光なり。模倣こそ総ての起源。総ての根源。誰しもが願い、思い、希う希有の渇望。模し、模索し、そして己の太極として組み込む。
和哉の渇望は強く堅牢なもの。それをたかだか聖杯如きに邪魔立てされる道理はない。
さらに握る右手に圧力をかけて紡ぐ。
「――告げる。
汝の身は我が元に、汝の身は我が権利なり。
聖杯に束縛されし哀れな霊魂よ。その身、この世の理を唾棄したいのなら希え。
誓いとここに、制約を掲げよ。戒めを解き放ち、戦を駆け抜ける英雄たちよ。
今宵を持って共に戦場を駆ける一筋の閃光となれ。汝らの宿願、

我が身で果たさせてやろう。
顕現せよ、我が身、我が総身を喰らいて力となせ――！」
強く、強く、より強く。聖杯から来る抑止の力を退けながら、さらに紡ぐ。
「汝の身を我が下に。君臨せしめよ。ここに、我が銘を汝らに託そう。
理を唾棄せよ。ここに、顕現するは現人神、黒井和哉なり。汝ら、希うはなんだ！？」
朱く、紅く、赤く紡ぐ。紫電を撒き散らしながらも和哉の詠唱に言霊はより強く刻まれていく。大聖杯の力は強く、この地は霊地としても上級のもの。それを容易に払拭できるものは、もはや人知の埒外。神の所業以外の何物でもない。
拮抗し、抗い続けるアヴェンジャー。
許さぬ、離さぬ、屈せぬ。
強き怨念、我執、執着……より簡潔にいうなら、そう表現してしまえば簡単だ。もともと、アヴェンジャーが希うは純粋なる「人の願いを叶えること」。だが、それは第三次聖杯戦争によって滅茶苦茶にされたも当然。
いまや、アヴェンジャーは狂いに狂った淀んだ聖杯でしかないのだ。かつて、今や亡き衛宮切嗣が聖杯が叶えさせようとした唯一の人物であり、彼は世界に絶望した上で行動していたのだ。そして、それ故に聖杯――すなわち、アイリスフィール・フォン・アインツベルンはそれを受諾しようとしたのだ。
だが、聖杯の何たるかを理解した切嗣はそれを拒絶した。それは見事なまでに天晴れだった。
歪みし絶望の塊、聖杯。それに繋がれ、円環するしかない無垢なる魂。霊魂。
その定めをこの黒井和哉がそのスレイプニルを、轍を解放させてやるのだ。
強力な魔力で抗っていた聖杯であったが、ついにその拮抗が崩れ

始め、そして……

「緩めたな、アンリマユ。これで最後だ」

僅かな笑みを見せた和哉は、この僅かな奇跡を見逃す道理はない。ここで解き放つのなら、この詠唱を置いてほかにはないだろう。

「Es schaeumt das Meer in breiten Fluessen《海は幅広く　無限に広がって流れ出すもの》

Am tiefen Grund der Felsen auf,《水底の輝きこそが永久不変》」

そうだ。放つとは先を駆け抜ける閃光であること。それが意味するのなら、超越を謳うだけのこと。

「Und Fels und Meer wird fortgerissen In ewig schnellem Sphaerenlauf.《永劫たる星の速さと共に　今こそ疾走して駆け抜けよう》」

「Doch deine Boten,《どうか聞き届けてほしい》

Herr, verehren Das sanfte Wandeln deines Tags.《世界は穏やかに安らげる日々を願っている》」

ツァラトゥストラが刹に願い、その魂が基となったロートス・ライヒハートが渇望したのは「刹那」。

一瞬の麗美を称えたい。美しいから、輝かしいからまた循環して駆け抜けた上で戻りたい。美しいまま残しておきたいのだ。

「Auf freiem Grund mit freiem Volke stehn.《自由な民と自由な世界で》

Zum Augenblicke duerft ich sagen《どうかこの瞬間に言わせてほしい》」

汝はかくも美しい。そうだとも、例え単一思考でしかなかろうと、

その思いは美しいとも。それは水銀も黄金も黄昏も言えることだ。
最上は黄昏。総てを慈しみ包み込む慈愛は甘美なるもの。思わず和哉でさえ讃えてしまうほどだ。至高と謳ってしまうほどに純粋で綺麗なのだ。
異なろうとも天を貫くのは黄金と水銀。この二柱はずば抜けて他者の渇望を凌駕するものであり、それ故に和哉も唾棄しない。
これらの渇望は、どんなものであれ和哉は良しと、そう想っているのだ。
「Ｖｅｒｗｅｉｌｅ ｄｏｃｈ ｄｕ ｂｉｓｔ ｓｏ ｓｃｈ？ｎ《時よ止まれ 君は誰よりも美しいから》――」
だからこそ、ツァラトゥストラよ。お前の渇望を使わせて貰うぞ。
「Ｄａｓ Ｅｗｉｇ－Ｗｅｉｂｌｉｃｈｅ Ｚｉｅｈｔ ｕｎｓｈｉｎａｎ．《永遠の君に願う 俺を高みへと導いてくれ》」
願うは停滞。そう、すなわち――
「Ａｔｚｉｌｕｔｈ《流出》――」
指し示すは――
「Ｒｅｓ ｎｏｖａｅ《新世界へ》――」
「Ａｌｓｏ ｓｐｒａｃｈ Ｚａｒａｔｈｕｓｔｒａ《語れ超越の物語》」
時の永劫不変なる停滞に他ならない。
刹那、今まで抗いそれこそ刹那という間に時の停滞により聖杯はその魔力による抵抗が凍結し、そしてそれを期に和哉はもう一度強く告げる。朗々とではなく、宣誓するかの如く。
「さあ出でませ、我が呼び込む至高の騎士。汝らの軛を今ここで解き放つ。
来い、ディルムッド・オディナ！サー・ランスロット！」
そしてついに、聖杯から魂魄と記憶と記録と共に、かつて第四次聖杯戦争に参加していた英霊が再び解き放たれたのだ。

第五話「ｉｎｃｏｍｐｏｓｉｔｅ」（後書き）

次回、第六話を投稿します
ご期待ください

第六話「旧英霊、再び」（前書き）

どうも、マキナです
第六話を投稿します
今色々模索していますので、どうか長い目で見守りください。

第六話「旧英霊、再び」

今この魔法陣の上で立っている和哉の目の前で傅く二人の男。
そう。先ほど聖杯から見事奪取することに成功し、自身を糧に顕現させた二柱に他ならない。
一人は癖のある長い髪をざっくり後ろで撫でつけた、端正な男だった。まず真っ先に目を惹くのは、その獲物。身の丈をさらに上回る二メートル余りの長竿は、もはや武具として見間違えようもない。七つのクラスの中でも“騎士”の座（クラス）として恐れられる三つ――セイバー、アーチャーに並びに立つ“槍”の英霊。
異様なのは、その象徴的でもある長柄の獲物が一本限りでなかったことだ。
ランサーは右手に緩く握った長槍の穂を肩に預けているのとは別に、左手にもう一本、右のそれより三割ほど短い拵えの短槍を携えていた。
槍の長さを活用して自在に操るとなれば、当然、両手を使って一本を構えるのが当然である。刀剣ならいざ知らず、二本の槍を同時に使うという流儀は尋常には想像しがたい。
そう。この男こそ、かつて第四次聖杯戦争時、ケイネス・アーチボルトに仕え、無念にも切嗣の計略によって死した騎士の誉れ高き英霊。
ディルムッド・オディナ。ケルト神話に名を残す英雄だ。その美貌に女性を恋に落とす魔貌を有するのもまた有名だ。
肩や、かつて騎士王と敵対し、狂気と憎悪を纏いながら狂った狂戦士として戦ったサー・ペンドラゴンことセイバーと主従関係であった最強の騎士、サー・ランスロットその人物である。
彼は最終的にはセイバーに突き刺され、その手で葬られたことで眠りについたが、死しても尚聖杯の轍がある限り、永劫解き放たれることが叶わない宿命にあったのだ。

ならば、彼らを解放させるためには、己が肉体を総身を糧にさせることで顕現させ、聖杯のバックアップ抜きで、今度こそ全力全開で競わせる機会を与えてやることこそが、現人神の所業とも言えるだろう。

「お目覚めは如何かな、ディルムッド。そしてランスロット」

「……なんと言えばいいかわからぬが、感謝する。再び、またこの地で戦える機会を与えたこと、感涙の至り」

「それは重々。んで、ランスロット？お前はどうだ？呪縛から解放したんだ、後はお前の意向で動くことを俺が許可する。どうだ？」

「感謝……の一言でしょうね。我が王との因縁は終わりました。ならば、後は戦う機会、そして救って下さったことへの感謝を示したい」

双方ともに和哉へ感謝の意向を示していた。双方先の戦争に遺恨がないといえば嘘になる。かたや計略で騎士王との決着に水を差され、かたや騎士王の腕に抱かれながら死したものの、それでも聖杯の呪いが付着している。

それらを解消するための機会を、全力を発揮できる機会をこの目の前の黒井和哉は与えたのだ。如何に自由とはいえ、和哉を糧に顕現し、まして聖杯のバックアップ抜きにしてもこの総身に巡る膨大な魔力量。

主従関係、ましてともに戦う戦友として戦うことこそがこの二人の天命ともいえるだろう。

そんな二人の心境を察しても尚、和哉は一つ頷き、

「相も変わらずの石頭が……まあいい。主従関係ではなく、友として駆け抜けてくれ」

両者の肩に手を置いて優しく友に語りかけるように言葉をかけてから、両者の間をスッと抜けて真正面を向いた。

「では、これより始まる聖戦に赴こうか。こちらも少々思惑があるのでな。戦略を実行する。ディルムッド、ランスロット。これより本来いないはずの二重たるセイバー、ランサーの座”クラス”とし

て活躍してもらう。期待してるぞ？」
『はっ！』
これを機に、とうとう第五の聖なる杯を求めて魔術師同士の闘争が、戦が、聖戦が、殺し合いが、戦争の幕が切って下ろされたのだ。

第六話「旧英霊、再び」（後書き）

次回、第七話を投稿します。
ではまた。

第七話「粛清」（前書き）

どうも、マキナです
第七話を投稿します
では、どうぞ

第七話「粛清」

「さて……今宵を以って聖杯戦争の鐘が鳴った。今しがた、七番目のサーヴァントの受諾を知覚した。この霊格、ディルムッド並びにランスロット。お前達二人なら分かるだろ？一体、どこのどいつなのかはな」

意味ありげな視線で傅く二人の英霊を睥睨する和哉。ほぼ寸分の狂いなくこのイレギュラーである二柱を喚起したと同時に、聖杯から排出された新たな霊格が降りた。この真正直で小細工などが嫌い、それでいてこの白銀の霊魂は間違いなく――

「……ああ。間違いなく、この霊格はセイバーだ」

「……王よ」

傅きながらもディルムッドとランスロットの表情は俯きながらも双方異なっていた。

片や、衛宮切嗣という魔術師殺しの計略による横槍が入り、また片や成就されたが再び逢い見えるであろう騎士王に思いを馳せている。

騎士道に忠実。それが二者の共通点であり、前回の参加サーヴァントでセイバーとの戦闘も体験しているというのが特徴であり、それ故に今回のこの聖杯戦争において彼の騎士王の上を行っているのは必然ともいえる。

しかも、相手は衛宮切嗣の養子でありながら異端にして異常、希少にして万億分の一の確率で出現する畸形。衛宮士郎ときたものだ。魔術回路は強靭で有り得ないのだが、なんせ魔術師としては三流。腕も三流。経験も知識もない。魔力量も契約による回路も欠損している始末。よくもその身に彼の妖精郷の鞘が埋め込まれているとはいえ、ある意味では哀れともいえるが、この主従関係もまた異様なもの。

ともあれ、

「ま、思うところはあるだろうが、まずは先に動くぞ。言峰綺礼に英雄王がいるんだ。この二人をまずは蹴散らしたい……と、言いたいところだが、まずは先に間桐臓硯を始末するぞ。キャスターの目も気になる、それ故にここから射殺すとしよう」
「なに？」
「……ここからか？」
突拍子もなくそう軽く気概なく言い、身を翻し逆の方角に位置するとある「家」を見据え、ストラを靡かせ白き手袋を嵌め直した和哉にランサーとセイバーは訝しんだ。
当然だろう。この魔法陣の位置する場所は地上より離れた遥か上空。地上を見渡せるのは、和哉の魔力提供により視覚補正と本来持ちえる視力によるものであり、それ故にこんな天高い上空から一体何ができるという？
確かに魔術師の中には、占星術と呼ばれるものや時間と星の動きに連動して、座標を合わせることで強力無比の「魔法」を発現することは可能だが、如何にそうはいってもこんな場所からではそうとう威力も高く、広範囲な魔術的攻撃になってしまう。だが、
「心配するな。俺が殺すのは間桐臓硯のみだ。慎二に桜は放置だ、まあ桜からは聖杯の欠片を取り除けばよいだけのこと。造作もないことだ」
至難の業である聖杯の欠片を切除することを造作もないと平然と言って退ける黒井和哉に、この二人の英霊は少なからず何かしらを感じていた。魔力提供に加え、聖杯から救出した男が神と称し、またそれが事実であることは理解してはいても、こうも平然と言う男の冷静な心境は並外れ事だ。
二人のそんな心境に異にも介さず、和哉はその方角に右手人差し指をさらに上の天に向け、朗々と詠唱を唱え始めた。
「罪の鎖より解放し、盲人に光を与え、我らの悪を去らせ、すべて良きものを与えたまえ
汝、御母なることを示したまえ、汝を通じ、救いのため生まれし

イエズスが祈りを聞き給うよう
霊妙にして、何にもまして柔和なる乙女よ、罪の赦しにあって、我らをも柔和で清らかとなし給え」
アヴェ・マリス・ステラ。めでたし、海の星という意味を持つ聖マリアを称えるイムヌスであり、この場合罪の鎖とはマキリ・ゾオルケンの積み重ねた所業に対してであり、盲人とはゾオルケン本人を指し示している。
よって、本来の渇望と願望を忘却した憐れな間桐臓硯に対して、このまま消し去ってやろうというのが和哉の今の心境なのだ。
「Ｂｒｉａｈ――《創造》」
そう。あの蟲虫を排除するのなら、灰燼にさせるだけだ。それも、灼熱の、炎熱の業火を以って。
抜刀が起きる。何が何でも抜かせてはいけなかった焔（スルト）の剣が、今ここに鞘走る。
ここに、再びかの赤騎士の渇望とそこから創造された創造位階。
絶対に逃げられず、絶対に命中し、総てを焼き尽くす炎が凝縮した世界。
黄金の獣に永劫焼かれ続けることを渇望した炎熱世界。ムスペルの名を冠する世界。
その銘は――
「焦熱世界・激痛の剣（Ｍｕｓｐｅｌｌｚｈｅｉｍｒ　Ｌ？ｖａｔｅｉｎｎ）
敵となる不純物（モノ）を撃滅する剣なり。
最後の詠唱が完了すると同時に、振り上げていた人差し指を振り下ろした。
刹那、大凡有り得ない熱量と焔が圧縮されて形を成した焔の、煉獄の槍が「とある」家にいる方角に向けて放たれたのだ。
灼熱の業火の朱槍が解き放たれ、その家に着弾した瞬間、天壌の業火が一軒家を天まで続く階を造り上げていた。
怨嗟も、怨念すら残さない無慈悲なる炎熱。そうだ、彼女の業火

は至高の黄金の破壊も冠している。故に、彼女の愛は至高の黄金そのものであり、殺すことでそれを証明するものでもあるのだ。
その家にいたであろう間桐臓硯は逃げる間もなく、ただ虚しくこの世から灰燼と成り灰となったのだ。
これが、原初の、初期の聖杯戦争の制作に携わったマキリ・ゾオルケンの、ある意味で正義の味方の成れの果てとなった男の哀れな末路であった。
そして、これが齎す意味は二つあった。それは――
「これで、間桐桜の蟲虫は死滅したはずだ。そして、霊格を有していた間桐家が消え去ることで全員に知れ渡るだろう。ふふ、さてさて……開戦の号砲は鳴らしたぞ？凱旋に相応しい戦いの鐘（ファンファーレ）を今景気よく警鐘したんだぞ？
動けよ道化ども。俺が演目を彩らせてやるから、せめて足掻け」
彼の水銀のように、黄金の獣のように天を見下しながら黒井和哉はこの聖杯戦争に参加するという意思表明を示したのだ。この主人に追従するランサーとセイバーは、ただ静かにそれを後ろから見守っているのであった。

第七話「粛清」（後書き）

次回、設定２
近日投稿します
ではまた

設定2（前書き）

どうも、マキナです
では、どうぞ

設定2

ここでは、各世界の能力並びに用語などを知っている方には申し訳ありませんが、敢えて搭載させて貰います。

・Ｄｉｅｓ ｉｒａｅ －Ａｃｔａ ｅｓｔ Ｆａｂｕｌａ－

聖遺物（ＡｈｎｅｎＥｒｂｅ）

過去の聖人の遺品のことではなく、人間の思念を吸収することにより自らの意思を持ち、絶大な力を持つようになったアイテムの総称。

聖遺物を扱うためには、メルクリウスの組み上げた複合魔術永劫破壊（Ｅｗｉｇｋｅｉｔ）と呼ばれる理論が必要。

これは発動に人間の魂を必要とし、使うには常に人間を殺し続けねばならない。殺せば殺すほど強くなっていき、殺した数に相当する霊的装甲を常に纏うようになる。しかし魂にも質が存在し、単純な量だけで決まるものではない。戦士や同胞の魂ほど質が高く、質と量の両面を兼ね備えるほど効率的に強化される。

エイヴィヒカイトを操る者は聖遺物によってしか倒すことが出来ず、それ以外の手段での攻撃は一切通じない。聖遺物による攻撃は、物理的・霊的の両面で防がなければ防ぐことは出来ない。また仮に肉体的損傷を受けても、喰らった魂（人数）に相当する生命力を得るため、自己再生される。

聖遺物を破壊されない限り、エイヴィヒカイトの使い手は不老不死であるが、逆に聖遺物が破壊された使い手は死亡する。しかし、これらの特性はエイヴィヒカイトの副次的作用に過ぎず、本来のエイヴィヒカイトがどのようなもので、何を目的として作られたのかは、生みの親であるメルクリウス以外誰も知らない。

経験を重ねることにより位階（Ｄｅｇｒｅｅ）は変化し、戦闘能力も飛躍的に増大する。

位階が一つ違えば、その戦闘力は桁違いになる。
聖槍十三騎士団に属する者たちは、ほぼ全員が第三段階である「創造」の位階にまで達しているが、内二名は形成位階止まりでいる。

活動（Ａｓｓｉａｈ）
初期段階。
限定的に聖遺物の特性を使用できる。

形成（Ｙｅｔｚｉｒａｈ）
聖遺物を具現化できる。
聖遺物の使い手の基本形態。
五感・霊感が超人化し、破壊と戦闘を高次元で行えるようになる。
高密度の魂を取り込んだ場合、それを具現化させることも出来る。

創造（Ｂｒｉａｈ）
切り札、必殺技を獲得する段階。
使い手の魂に刻まれた渇望をルールにした、己と己の聖遺物にとってのみ都合のいい異界を創り出す。

覇道型
術者の周囲の空間を異界に変異させる。
他者を食い潰して広げる道であり、主に「～であったらいいのに」という思いが元にある。
一対多の戦闘に向いている。

求道型
術者自身を異界として肉体変化や特殊能力を付加され、己を異界とする。
自分一人で突き詰めていく道であり、主に「～になりたい」という思いが元にある。

一対一の戦闘に向いている。
自己完結しているため効果が強く破られにくい。また他者を取り込まないため、他者に影響されずにその効果を発揮できる。

流出（Ａｔｚｉｌｕｔｈ）
エイヴィヒカイトの最上位階。創造の異界とそのルールを永続的かつ全世界に流れ出させ、既存の世界法則を塗り替える。
ただし求道型の流出は、術者自身が世界の理から外れた完全永遠の存在となるだけで、他に一切影響を及ぼさないため、真の意味での流出には達せない。
また聖遺物は四種の武装形態（Ｋａｍｐｆｆｏｒｍ）に分類される。

人器融合型
肉体を聖遺物と融合させる。攻撃力に特化し、全タイプ中最高の身体能力を発揮する。
性格としては好戦的で破壊的な者、刹那主義者や享楽主義者などがなりやすい。

武装具現型
聖遺物を刀剣などの武器として扱う。
突出した点も穴もない特性上、実力以上の力は発揮できないため、未熟な者は決定力のない器用貧乏だが、強い者は万能となり隙がなくなる。主従関係がはっきりしているため暴走・自滅の危険性が低い。

事象展開型
魔術や呪術のような働きをする。
物理的破壊の顕現ではないため攻撃力は低く、中には攻撃力が皆無の者もいるが、反面防御や補助に優れており、殺すことが困難。

特殊発現型
上記のいずれにも属さないか、または複数の性質を持つ。
他を上回る強大な力を発揮することもあれば、状況次第では全く役に立たないこともあるなど、非常に不安定なタイプ。

エイヴィヒカイト（Ｅｗｇｋｅｉｔ）
聖遺物を武装化し、超常の力を行使する理論体系。永劫破壊。聖槍十三騎士団副首領、メルクリウスが編み上げた複合魔術。
駆式に人間の魂を必要とし、エイヴィヒカイトを操るには常に殺人を続けなければならない。殺した人間の数に相当する霊的装甲を常時纏うようになり、殺せば殺すほど強くなっていく。また、原則としてエイヴィヒカイトを操る者には銃火器やナイフ、打撃などといった“常識的攻撃手段”は通じず、ダメージを与えることは出来ない。
その他の特性として、聖遺物とその使徒は、聖遺物によってしか倒すことが出来ない、聖遺物が破壊されればその使徒も砕け散る、聖遺物による攻撃は、物理的・霊的の両面で防がなければ止められない、聖遺物が破壊されない限り、その使徒は不老不死、などがある。
しかしこれらの能力もエイヴィヒカイトの副次的作用に過ぎず、本来のエイヴィヒカイトがどのようなものなのか、何を目的とし、何処に至るためのものなのかは、生みの親である副首領以外、誰も知らない。

・ＴＹＰＥ－ＭＯＯＮ
根源
世界の外側にあるとされる領域で、「あらゆる事象の発端」「万物の始まりにして終焉」。すべての魔術師にとっての最終到達目標である。

起源
あらゆる存在が持つ、原初の始まりの際に与えられた方向付け、または絶対命令。あらかじめ定められた物事の本質。

抑止力
現在の世界の存続を図る、カタチのない力。
集合的無意識（本作での使われ方は超個体に近いもの）が生んだ安全装置。

真祖
吸血鬼の一種で吸血種の中でも特異なモノ。
人間を恐れた星が生み出した、人間を律する「自然との調停者」。星をかつての姿「真世界」に戻そうとする「自然（星）の触覚」。
精神と肉体の構造は律する対象である人に似せて作られているが、分類は受肉した自然霊にあたり、生まれた時から人知を超えた力を持つ。
高い身体能力に加え、精霊に近い性質を持ち、世界と繋がることで思い描く通りに自身（精霊）と自然を変貌させる「空想具現化」（マーブル・ファンタズム）の異能力を有す。

直死の魔眼
「モノの死」を視覚情報として捉えることのできる眼。
これが読み取って視覚する「死」とは単なる「生命活動の終了」ではなく、あらゆる意味や存在そのものが発生した瞬間に定められている概念である“いつか来る終わり”、「死期」や「存在限界」を意味し、存在の寿命そのものである。

魔術と魔法
「魔術」とは、人為的に神秘・奇蹟を再現する行為の総称。

魔力を用いて「世界にあらかじめ定められているルール」を起動・安定させ、神秘を起こす。
「魔法」とは、魔術師たちの最終到達目標。

魔眼
視界内の者に一工程の魔術を行使する眼。
行使する魔術の種類は魔眼により、暗示・魅惑・束縛・石化など多数存在する。
魔眼は色でランク分けされ、緑や赤、黄金、宝石、虹の順に格上になっていく。

固有結界
“異界創造”法の一種。自らの内面である心象世界をカタチにし、現実を侵食させて創り出す結界。
術者の心象世界の体現ゆえに個人個人でその能力の概要は大きく異なり、カタチは常に一定で術者の意思では変えられないが、影響下のあらゆるものを“現実と異なる現実”に従わせることができる。
本来は悪魔や精霊の能力だが、死徒や魔術師も一部の上級者が可能とする。

宝具
ノウブル・ファンタズム。貴い幻想。
サーヴァントの持つ武装であり、象徴であり、奥の手。
それだけで優れた武器でもあるのだが、その本領は「真名」を呪文として唱える事によって発揮される。
物質化した奇跡であるそれが開放する真の力は、魔術師の魔術のレベルを凌駕している。

聖杯

神の血を受けた杯。
手に入れた者のあらゆる願いを叶えるという願望機であり、最高位の聖遺物。

聖杯戦争
およそ二百年前から冬木市で繰り返されている大儀式。
あらゆる願いを叶えるという聖杯を手に入れる為に、聖杯に選ばれた七組のマスターとサーヴァントがその技を競い合い、他の六組を排除しなければならない殺し合い。

クラス
役割。クラス。
いかに聖杯といえど精霊に近い存在を無制限に呼び出す事はできない。
故にサーヴァントが形になりやすくし、仮初めの物質化を可能とする為に予め用意した役割で、「セイバー」「ランサー」「アーチャー」「ライダー」「キャスター」「アサシン」「バーサーカー」の七つが存在する。
また、各クラスはそのサーヴァント個人が習得している技能とは別にそれぞれ固有能力を有する。

第二魔法
並行世界の運営。
ゼルレッチはこれによって「個」を維持したままでの並行世界への移動を可能とする。

第三魔法
魂の物質化。魂自体を生き物にして生命体として次のステップに向かわせるという物。
精神体でありながら単体で物質界への干渉を可能とする高次元の

存在を作り出す業。
「天の杯（ヘブンズフィール）」と称され、アインツベルンから失われたとされる神秘であり、真の不老不死を実現させる大儀礼。

第三要素
「精神」の事。霊体である存在にとってのエネルギー源になる。

英霊
サーヴァント。
聖杯戦争において七人のマスターに従う、それぞれ異なった役割（クラス）の使い魔。
使い魔としては最高ランクで魔術よりも上にある存在。一般に使い魔という単語から連想される存在とは別格。
その正体は英霊という、生前は英雄であった者たち。剣術・魔術に長け、人の身でありながら精霊の域にまで達した存在。「宝具」という必殺の武器を持つ。

概念武装
決められた事柄を実行するという固定化された魔術品。
物理的な衝撃ではなく概念、つまり魂魄の重みによって対象に打撃を与えるという物。

・ＤＵＥＬ　ＳＡＶＩＯＲ
根の世界アヴァター
もっとも根源的な元素となるものを生み出し伝える事を役割とした世界。

救世主候補
破滅の軍団からアヴァターを守るために別世界から召喚される人間。

実力が認められればアヴァター出身者でも救世主候補になることもある。

召喚器

救世主たちが使用する武器。

救世主候補となった人間はその手の中から現れ、一般人が使う武器よりも強力な力を手に入れることが出来る。

武器は剣や弓など救世主となった人間の特性に合わせた武器となり、能力も様々。召喚器には人格が存在し、ほとんどの人格は女性だが、トレイターのみ男性になる。

赤の書

救世主候補はそれぞれ素質がある人間をこの世界に呼び出すためにこの世界へと召喚するために必要なもの。

召喚される人物はアヴァターの事情を説明した上で救世主候補になることを納得してもらい召喚されることになっている。

・アスラクライン

機巧魔神（アスラ・マキーナ）

模造品の悪魔。

？鐵（クロガネ）

漆黒の魔神。

翡翠（ヒスイ）

透きとおった淡緑色（アイスグリーン）の魔神。

白銀（シロガネ）

銀色の魔神。

薔薇輝（ロードナイト）
薔薇色の魔神。

翠晶（スイショウ）
翠色（みどり）の魔神。

蒼鉛（ビスマス）
暗蒼色の魔神。

鋼（ハガネ）
最終形の完成された機巧魔神。？鐵と白銀の能力を共に使え、それらを組み合わせて発動させる時空間転移、時間の巻き戻しが可能。

副葬処女（ベリアル・ドール）
機巧魔神を動かすための「贄」として機巧魔神の中枢部に収められている少女。

演操者（ハンドラー）
機巧魔神を召喚し「演操（ハンドリング）」することの出来る人間。

元演操者（エクス・ハンドラー）
かつて、機巧魔神の演操者だった人間。

機巧化人間（フェミナ・エクス・マキーナ）
サイボーグ。

悪魔
男性の雄型悪魔と女性の雌型悪魔が存在。

非在化
異世界の影響力である魔力を行使する度に、この世界が自身にとって異物である悪魔を排除しようと働くために、その反動を受けること。
その結果、体が透明な硝子のような結晶体にかわり、消滅していく。

契約者（コントラクタ）
悪魔と「契約」を結んだ人間のこと。
使い魔を従え、それに守られる。契約者の心が悪魔から離れると、悪魔の「非在化」を引き起こしてしまう。

使い魔（ドウター）
雌型の悪魔が契約者に与える力の具現化した象徴として、契約者に従属する獣。
悪魔の属性によって様々な特殊能力を有し、機巧魔神に匹敵する戦闘力を持つ。

魔神相剋者（アスラ・クライン）
機巧魔神と使い魔、本来相反し打ち滅ぼし合う筈の2つの力を手に入れた危険な存在。演操者であり契約者でもある。
演操者と契約者、どちらの立場から見ても本来の在り方とは違うイレギュラリーであり、世界の仕様の裏をついた存在。

・烈火の炎
火竜
全部で8匹存在する。それぞれの火竜には異なる能力がある。炎を様々な形に変え攻撃するが、性格も異なっており扱いが簡単な者もいれば難しい者もいる。
能力の発動の際には名前の頭文字を描くことで竜を呼び出せるが、

この動作が完全なものでないと火竜は発動しない。火竜同士の力はほぼ互角。

崩
大きな目と長いひげが特徴の火竜。
球状の炎で攻撃し、数は１つから無数まで出すことができる。

砕羽
８つの目と後ろに伸びた一本角の火竜。
烈火の下腕に翼状の炎の刃を形成する。

焔群
十字に開く鳥の嘴のような口を持つ「竜之炎参式」の火竜。
炎をムチ状に形成し、近中距離での攻撃を担う。

刹那
「竜(し)之炎肆式」の火竜。
発動と共に隠された唯一の目が開き、その目を見たものを一瞬にして燃やし尽くす「瞬炎」を持つ。

円
「竜之炎伍式」の火竜。
三つの目で火の玉を発生させ、それらを頂点とした「面」による炎の結界を作り、攻撃を跳ね返すが、頂点となる火球を破壊されると結界の面積は小さくなり、あまりに小さくなると内部の人間が危険になる。

墨
爛れたような皮膚の「竜之炎陸(ろく)式墨」の火竜。「型無(かたなし)の墨」。
術者である烈火が頭に描いたものを炎の幻として見せることがで

きる「幻炎」を持つ。

虚空

一つ目が特徴の「竜之炎漆式（しち）」火竜。

一つの炎弾を作り出し、そこから強力なレーザー砲のような炎を放つ。

裂神

後ろに伸びた2本の角とトサカ状の頭髪を持つ「竜之炎捌式（はち）」の火竜。

死者の魂を取り込んで術者の炎とする能力を持つ。

・風の聖痕

風術

風の精霊の力を借りる術。

浄化の風

和麻が使用する蒼い風。

コントラクター（契約者）

人間には決して対抗できない力を持つ超越存在と契約を交わした者。

精霊王と契約を交わした場合、その力を譲り受けることができる。

炎雷覇

剣の神器。

・レンタルマギカ

妖精眼（グラムサイト）

神代の魔法使い達が持っていたとされる伝説の魔眼で、魔物の「

全て」を見ることができ、強力すぎるその能力は所持者を蝕むと伝えられている。

・史上最強の弟子ケンイチ

開展と緊湊、制空圏

「武術の段階」。

「先に開展を求め、後に緊湊に至る」という中国武術で実際に使用されている言葉から来ている。

「武術の第二段階」であるところの「緊湊」に到達した者は、自身を中心とする全方位に「制空圏」と呼ばれる球状空間を展開し、領域を侵犯した敵対物に対する識域下での迎撃行動を起こすことが可能となる。

・セキレイ

鶺鴒計画

１０８羽のセキレイを帝都に放ち、選ばれし葦牙と共に最後の１羽までバトルロイヤル方式で闘わせる。最後に残った葦牙は世界の命運を手に入れ、セキレイは最も好きな人と永遠に嫁がれるという。

セキレイ

鶺鴒計画の中心。葦牙を嵩天へ導くため世に放たれた１０８羽の存在。

見かけは人間と変わらず、遺伝子的にも人間に近いが共通して鶺鴒紋があり、個体別に特化した能力を持つ。

葦牙

セキレイを御する能力を持った人間。

セキレイを羽化させ、その主人になることができる。

一部の葦牙は複数のセキレイを羽化させることができたり、他の能力を身につけたりできる。

鶺鴒紋
羽化したセキレイの証。首筋に近い背中に現れる。
紋の出たセキレイは自分の能力を自在に扱えるようになり、祝詞を唱えることで能力の強化が可能となる。

鶺鴒基幹
鶺鴒の中枢となるもの。鶺鴒の魂とも呼ばれる。

祝詞
セキレイが各々に固有のものを持つ、より強大な力を発動させる時に唱える言葉（要粘膜接触）。

・戦う司書
追憶の戦器
神々が作り出したとされる兵器。７つあるとされる。

常笑いの魔刀シュラムッフェン
針状の小剣の形をした追憶の戦器。
「因果抹消攻撃」という独自の機能を持ち、斬るという過程と斬ったという結果を切り離すことが出来る特性を持つ。振っただけで無数の剣撃が相手に襲い掛かり、あらゆる敵を葬るという半自動攻撃と危害を加えてくる攻撃から身を守る攻防一体の魔剣。

虚構抹殺杯アーガックス
杯の形をした追憶の戦器。その杯に汲んだ水に消したい記憶を囁き、水を飲み干すことで記憶を消す機能を持つ。

設定2（後書き）

次回、第八話を投稿します
では、また

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1564y/

Dies irae -駆ける、現人神の刹那-

2011年11月7日03時19分発行